The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	並列形式「ナリ」の変
Author(s)	岩田, 美穂
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2006, 40, p. 75-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6125
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

並列形式「ナリ」の変遷

岩田美穂

1. はじめに

現代日本語には、「行ったり来たりする」の「タリ」や「行くとか来るとかする」の「トカ」ような、一文中に複数の要素を例示的に列挙し示すための形式（以下このような形式のことを「並列形式」と呼ぶ）がいくつか存在する[1]。その中で、本稿では次のような形式「ナリ」を取りあげる。

（1） a．電話をするなりメールを送るなりして連絡してください。
　　 b．すぐに太郎なり花子なりが来るでしょう。

現代語におけるナリ並列の意味特徴は一般的に、「並列、列挙した中の、どれか一つを選択する意を表す」とされる。しかし、用例（2）aのように並列される項目の後項が不定詞になることがあるが、この場合、「自炊する」と「何かをする」ということどちらかを選択するというよりは「節約」に関連する一連の要素の中から「自炊」のみを選び出してきて、あとの要素は省略されていると考える方が妥当である。また、ナリ並列は、用例（2）b、cのような既に実現している出来事には使用しにくいことから、ナリによって並列される要素は、未来や仮定、意志などの不定的な出来事であることがわかる[2]。

（2） a．今月は節約のために自炊するなり何なりしなければ。

b.*節約のため自炊するなり無駄遣いを控えるなりした。

c.?節約のため自炊するなり無駄遣いを控えるなりしている。

（3） すぐに太郎なり花子なり誰かがくるでしょう。

また用例（3）のような場合、実際に「来る」のは太郎でも花子でもない次郎でもよく、ナリによって並列される要素は、その要素自体が成立するかどうかではなく、実際にはそれらの要素に代表される大きな事態の中で、いずれか一つが成立すればよいということになる。

したがって、形式ナリの基本的な機能は、まず、「ある事態の要素を例示的に列挙していくこと」であり、それらの要素から想定される背後の大きな事態に含まれる要素のうち、少なくとも一つが成立するという「選択的不定性」を含意している、と言える。

このような並列形式「ナリ」はもともとコピュラ動詞「ナリ」の終止形に由来しており、並列形式としての用法は江戸期に入ってから見られるようになる。しかし、江戸期に見られるナリ並列には最初から上記のようなモーダルな意味が備わってはない。したがって、現代語へと繋がる意味を有したナリがどのように成立したのか、という点が従来から注目されてきた。この点について言及したものに、此島（1966)、鈴木（1993）がある。本稿では、同じくナリ並列の変遷過程に注目し実例を観察した後、両説の問題点を指摘し、それらとは異なった観点を提示したい。

2. 実例観察

2.1 不十分終止用法

コピュラの「ナリ」は、室町以降、「ジャ」などの台頭により用いられなくなる。しかし、コピュラとしての機能は失ったものの、形態自体が消

滅したわけではなく、次のようないわゆる不十分終止用法として室町以降も残存していたことが知られている（京極 1965、出雲 1985、京 1993等）。この用法は、本来の助動詞としての機能を衰退させた形態の終止形を用いて、主文に対して注釈句的な文を接続する用法である。

（4）　a．二刀させば、内甲も痛手なり（vchicabutomo itade nari,）、ついに討たれた。　（天草版平家物語、4.348）

b．他人ノ物ヲヌスンダヨリヲヤ子ノアイダナリトガヾカルイホドニ　（玉塵抄、出雲 1985より）

ナリ並列は、このような不十分終止用法からの派生であると考えられる。不十分終止用法から並列形式へという変化は、ナリだけに見られる現象ではなく、出雲（1985）はじめさまざまな所でその関連が指摘されてきた[3)]。しかしながら、注釈句を形成する不十分終止用法からどのようなメカニズムで並列形式へと変化するのか、という問題については明確な結論は得られていない。この点に関しては、他の並列形式も含めた体系的な調査と考察が必要であろう。本稿では、とりあえず江戸以降並列形式となったナリだけを扱うこととするが、鈴木（1993）が述べているように、初期段階のナリ並列には、この不十分終止用法の強い影響が見られるため、ナリ並列の前段階として一旦おさえておく。

2.2　上方におけるナリ並列

さて、上記のように不十分終止用法として形態を残存させていたナリに、江戸期にはいると並列の用法が見られるようになる。江戸期に見られるナリ並列には、鈴木（1993）が指摘するようにいくつかの変化が見られることが注目される。本稿では、その変化を意味と構文の側面から以下の三つのタイプに分類し、考察していく。

まず一つめのタイプは、用例（5）に代表されるような例である。例えば、（5）aでは、乳母の息子で、かつ家中に仕えている伝内という人物が、その主との関係について、「わたしたちは乳兄弟だし、主従だし、」と説明している場面である。その他の用例もすべて、aと同様に「〜だし〜だし」あるいは「〜であり、〜であり」という意味に解釈できる。このようなナリをタイプⅠと呼ぶ。

タイプⅠ

（5） a．私は乳母が悴、和田伝内と申して、家中に若党仕る。（中略）乳兄弟なり、主従なり。私迎ひとあるならば、恥も恥辱も振り捨てて、御息災な顔ばせ見せてくださるはずなるに、

（心中刃は氷の朔日、2.270）

b．ア丶いや＼／其様に隠し包ましやる事はない。家主なり借主なり裏と表の事なれば内輪同前心置しやる事はいらぬ。

（身体山吹色、18.57）

このタイプⅠは、いずれも、ナリ並列句が主文に対する注釈句となっている点で先に述べた不十分終止用法の意味機能を色濃く残しているといえる。

次のタイプは用例（6）にあげたような例である。（6）aでは、息子と娘を許嫁にしたので、貴方も私もあいやけ（婿・嫁双方の親どうし）である、といった意味に解釈される。このように、先ほどのタイプⅠとは異なり、「〜も〜も」あるいは「〜と〜と」のように解釈できる例をタイプⅡとする。

タイプⅡ

（6） a．御子息力弥殿に。娘小浪を云号致したからは。お前也私也。

あいやけ同士御遠慮に及ぬ事。

（仮名手本忠臣蔵、354）

b．郷助様なりお前なり知つての通り殿様とは突出しの其夜から互ひに深ふ言かわした…　（傾城花街蛙、10.38）

c．おまへなりわし也糸さんなり、みな店が違ふて有じやないかいな。　（粋学問、311：鈴木 1993より）

最後にタイプⅢをあげる。これは用例（7）を見るとわかるように、現代語の「ナリ」とほぼ同様に例示の意味に解釈できるものである。

タイプⅢ

（7）　a．其内にはどう成かう成訳が立ませふ

（韓人漢文手管始、381）

b．大也小也、義理をかけてをゐてから。ごて＼／いはれたときにことはりをいふと。…どのやうにこまるとおもふてじや。

（箱枕、27.123）

c．どふなりこふなりだかれてねさへすれは、もふいごかしやせぬ。　（傾城桃山錦、22.11）

この3つのタイプはそれぞれまず、18世紀初頭から最も早くに見られるのがタイプⅠで、次いで18世紀中頃からタイプⅡが、18世紀末～19世紀にかけてタイプⅢが見られるようになる。タイプⅠ～Ⅲを比べてみると、タイプⅠ、Ⅱはどれも並列される要素は「既に実現している事実」として捉えられるが、タイプⅢは、波線で示したように不確定の出来事に使用されていることが大きな特徴である。先に現代語で確認したように、不確定の出来事は例示のナリの一つの特徴と言える。従って、この点からタイプⅢの現代語との近さを判断することができる。

2.3 江戸におけるナリ並列

前節でみたように、江戸期上方においてナリ並列は3つの意味・用法を有している。この3用法は、江戸後期まで続く。したがって、現代語におけるナリ並列を考え合わせるならば、明治以降も考察に含める必要がある。しかしながら、明治以降の資料は東京を中心としたものになるため、資料的な隔絶が問題となる。そこで、近世後期の江戸語におけるナリ並列についても考察対象に含めておきたい。江戸語に見られるナリ並列を整理してみると、上方と同じく、やはりⅠ～Ⅲの3つのタイプにわけることができることがわかる。

タイプⅠ

（8）　姉はんの骨折で、一人前にはなれずとも、少しづつでも出るやうに仕込んで貰つたんですから、お師匠さんなり、主人なり、仇に思やしません。　（春色恋の染分解、180）

タイプⅡ

（9）　蓼食う虫も好き＼／で、お前なり小萬なり、わるくも思つて呉れねえかして、実にしてくれる　（春色恋廼染分解、427）

タイプⅢ

（10）　a．勿論是から福住屋へも、懸合ひ付けて、首代金なり下手人なり、處置を付けにやなりやせん。　（恋の花染、102）

b．さア其の上では手前の働で、一年なり半年なり、傳兵衛どのを育まにやアならねえ。　（恋の花染、117）

上方と異なる点は、タイプⅢがやや多く見られることである。ただし、江戸における用例は、洒落本や噺本類にはどのタイプも見ることが出来ず、ほとんどが19世紀以降の人情本類に偏る、という問題がある[4]。上方と江

戸を同様に考えることができるかどうかは一概には言えないが、上方語から江戸語、そして明治以降の東京語という関係を考える場合、タイプⅠ～Ⅲが上方、江戸ともに見られる、という点には注目される。

3. 先行研究とその問題点

江戸期に見られるナリ並列は、現代語と異なり、タイプⅠ～Ⅲの3つの意味にわけられることを見てきた。このことは、ナリ並列の展開において何を意味するのだろうか。

先行研究ではタイプⅠ、Ⅱをナリ並列の本来の用法であるとする。それは、先に述べたようにタイプⅠの「～であり」「～だし」というようなナリ並列が、意味的に不十分終止用法の延長上に考えられるからである。此島（1966）ではこれを「累加」と呼んでいる。この累加という意味からすれば、「～も」と解釈できるタイプⅡもタイプⅠから大きくはずれるものではない。また、タイプⅠ～Ⅲが見られるようになる順番から考えても、恐らくは累加の意味をもつタイプⅠ、Ⅱが本来の用法であったと考えてよいだろう。したがって、ナリ並列を歴史的に考察する上で、タイプⅠ、Ⅱの「累加」とタイプⅢの意味との関係が問題となる。

この点について、此島（1966）では、Ⅲの「選択」の意味を持つナリは、江戸中期以降に例示を表すようになっていた「ナリトモ・ナリト」（以下ナリトモで代表）とⅠ、Ⅱのような累加を表す「ナリ」とを混同し「ト（モ）」が脱落したものである、とされている。

(11) 此島（1966）：

右の第二例（真珠なり金子なりとも早く否やをお取極下さいまして（いろは文庫）――引用者注）における「真珠なり」は、「真珠なりとも」とあるべきが、並立の「なり」との混合によってこ

うなったものと思われるが、これがさらに下の「金子なりとも」に及べば、「…なり…なり…」で択一の意を表すようになる。

（p. 225、用例は一部省略）

しかし、2節で見たように、18世紀後半の上方に既にタイプⅢが見られるのであるから、此島（1966）があげる後期江戸語の用例は、意味派生の根拠とはならない。鈴木（1993）では、此島（1966）のこの点を受けて上方資料の範囲内で調査をし、本稿の基準とはやや異なるが、ナリ並列の変遷にいくつかの段階があることを指摘している。その上で、間に「ドウナリカウナリ」を想定しているという違いはあるものの、概ね此島（1966）と同じ考えに立っている。

（12）鈴木（1993）：

ドウナリカウナリをドウナリトカウナリトの単なるト脱落形とする見方を稿者は採らないものの、結果として両者が極めて近似したものとなっていることは右に挙げた例からも認められよう。（中略）すなわち、ドウナリカウナリの出現、さらにその継続的使用はナリト類の領域を刺激し、その刺激の及び易かった部分から、トの脱落を可能にしたと考えるのである。（p. 35）

しかしながら、ナリ並列とナリトモとの関係については、いくつかの疑問点がある。まず第一にナリトモは衣畑（2005）によれば、江戸期においては、既に主節の動詞句を取り立てることができるようになっており、動詞句内の要素を焦点化することが可能になっている[5]。仮にナリトモの影響と考えるならば、ナリ並列も動詞句や格成分などの様々な要素をとってしかるべきであるが、江戸期においてそのような例は見られない。

（13）a．此福はやらずはなるまひが、何とせうぞ、にくさもにくしな

ぶってなりともやらふ。 (虎明、中67)

b．仕方の悪いことがあらば、なぜ殺しなりともなされずして何か恨みの有るぞとよ。 (卯月紅葉60)

(衣畑2005、p. 152より。ただし用例番号は改めた)

第二に、ナリトモは、取り上げる句が一つでも二つでも文として成りたつが、ナリ並列は、基本的に取り上げる句が二つ以上ないと、文として安定しない。また、ナリトモは(15)(16)のように不定詞を取り、一項のみで述べることができるが、ナリはこれができない。つまり、ナリトモの表す例示とナリ並列の表す例示は、その例示の表し方に違いがあるということになる。

(14) a．見上げなりとも見おろしなりとも、御勝手になされ

(女土佐日記、156)

b．此子を畠へなりと埋めてしまひませふか

(身体山吹色、18,36)

(15) たくさんな女子どれなりとがてんする女を女房にしたがよいわいな (聖遊廓、2,331)

(16) a．なんなりと遠慮無く仰ってください。

b．*なんなり遠慮無く仰ってください。

第三に、鈴木(1993)にも言及されているが、仮にナリトモが縮約の方向をとるとしても、(17)に挙げたように18世紀からすでに「ナト(ナット)」という縮約形が存在し[6]、単純に「ト」の脱落とは考えにくい。

(17) a．そりやそなたの手で書事じや。どふなと勝手にさつしやれ

(幼稚子敵討、8.367)

b．こりや、仲居共、茶なと酒なと持て来んかい、

（恋相場箕請入札、29.107）

以上のような点を考慮すると、タイプⅢの派生を単純にナリトモから「トモ」が脱落したものだとする事に疑問が生じてくる。したがって、本稿ではナリ並列とナリトモを関係づける立場を取らず、ナリ並列のタイプⅢの意味派生に対して別な観点を提示したい。ナリトモの外的要因を考えないとすると、やはりナリ並列の内的要因からその展開を考えていく他ない。次節では、ナリ並列内部からその展開を考察していく。

4. ナリ並列句の統語的位置変化

タイプⅠ～Ⅲの変化を観察すると、単なる意味変化だけではなく、構文上の違いもあることがわかる。本稿では、このナリ並列の構文上つまり統語的な変化に注目して考察して行く。まずはタイプⅠの構造から考えてみる。タイプⅠを再掲する。

(18)　そなたの父御は叔母が兄、（中略）「（治兵衛は）婿なり甥なり、治兵衛がこと頼む」との一言は忘れねど、（5再掲）

(19)　[[Xハ［AナリBナリ]］［S]]

これは、「治兵衛（そなた）」という主題に対して、「婿」という要素と「甥」という要素がある、ということになる。このタイプⅠは、並列句が述語句を形成し、さらに後続の主節に対しての注釈句となる。構造は(19)のように考えられる。この時ナリの働きは、主題Xに対して共通する複数の要素（X＝A、X＝B）を提示するということと考えられる。

この構造は、不十分終止用法の延長と言える。不十分終止用法は、「XハP」という構造を作り注釈句となるが、本稿ではこのようなナリの例を不十分終止用法の一端として考えるのではなく、並列形式として扱う[7]。

次に、タイプⅡのものを考えてみる。

(20)　…先ツ達ツて御子息力弥殿に。娘小浪を云号致したからは。
お前也私也。あいやけ同士御遠慮に及ぬ事。（6再掲）

(21)　[[AナリBナリ] X]

これは、「お前」の息子と「私」の娘を許嫁にしたので、「お前」も「私」も「あいやけ（婿・嫁双方の親）」であるということになる。タイプⅡでは、並列句は名詞句（主題句）を形成するのが特徴である。構造化すると、(21) のようになる。この時ナリの働きはX（述語）に対して共通する要素A、Bを提示すること（A＝X、B＝X）となっている。

タイプⅠでは、並列句は述語句となり、更に後続の主節の注釈句となるものだった。タイプⅡでは、並列句自体が主題句となり、主節の中に含まれる。これは統語的には大きな変化である。しかし、実はナリの機能自体はそれほど変化していない。タイプⅠでは、注釈句内部で「主題－解説」構造を作り、主題の部分を母体として要素を取り出していた。タイプⅡでは、並列句の位置が変化することにより、共通する要素を取り出す母体が、主節の述語句となっている。つまり、タイプⅠ、Ⅱともに、ナリの機能としては、並列句が統語的に関係をもつある部分を母体として、そこから共通する複数の要素を取り出し提示する、という働きであると考えられる。

では、このタイプⅠ、Ⅱの機能を踏まえた上でタイプⅢを考えてみよう。

(22)　大也小也、義理をかけてをゐてから。（7再掲）

(23)　[[[AナリBナリ] X] ガ（ヲ）Y]
[Yガ（ヲ）[[AナリBナリ] X]]]

タイプⅢの場合、注目されるのは、ナリ並列が修飾句になっているという点である。連体修飾、連用修飾の両方があるが[8]、これを最も単純に構

造化してみると、(23) のように標示できる。

ここで、タイプⅠ、Ⅱで提示したナリの機能を (23) にそのまま適応すると、ナリ並列句が統語的に関係をもつ部分、つまり被修飾句から共通する要素を提示することになる。この機能の点では、同じに考えることができる。しかし、タイプⅢにおいては、並列句が結びつく被修飾句Xは、必ずさらに文中でYと関係を持つ。この点がタイプⅠ、ⅡとⅢとの決定的に異なる点である。これを次のように図式化してみる。

(24)　A → X－Y ← B

(24)′　大 → 義理－かける ← 小

この時、Yにとっては、並列項目A・Bはそれぞれパラレルな関係であると言える。ここに、ナリ並列の例示的意味の発生を見ることができるのではないか。つまり、タイプⅠ、Ⅱ段階でのA－X、B－Xという関係性の上に、新たにYという要素が入ることにより、複数の並列的な事柄を表すという機能へとシフトしたと考えられる。

さて、上記のように考えられるとして、なぜ「選択」なのか、という点はやはり問題となる。(24) ではその点が十分説明できない。(24) では並列項目は大 (A) と小 (B) であり、それが結びつくものは義理 (X) である。義理 (X) という名詞に含まれうる要素の範疇において、大 (A) の義理、小 (B) の義理は等位に存在しうるであろう (ここまでの関係を表すのがタイプⅠ、Ⅱの働きである)。しかし、「義理 (X) ヲかける (Y)」になった場合、大 (A) の義理 (X) と小 (B) の義理 (X) は同時にかける (Y) ことはできない。このような非同時性が選択の意味に関係していると考えられるが、この点は今後考察を深めたい。

5. まとめと今後の課題

本稿では以下のことを述べた。

①江戸期におけるナリ並列には3つのタイプが見られ、このうちタイプⅠ、Ⅱは現代語にはない意味用法であり、タイプⅢが現代語に共通する。

②累加のタイプⅠ、Ⅱから例示のタイプⅢへという変化の要因には「ナリトモ」の影響は考えにくい。

③ナリ並列にタイプⅢの意味が派生したのは、ナリ並列句の統語的な位置変化が一つの要因として考えられる。

③については、実例の観察に基づく考察であるが、理論的な裏付けに欠ける。特に、統語的な変化の要因について（注釈句であったナリ並列句が何故主節に含まれるようになったのか、など）が問題として残る。

また、今回は触れなかったが、江戸期に続く明治期には、タイプⅠ、Ⅱが消滅し、タイプⅢしか見られなくなる[9]。(25) のようにナリ並列句がそのまま名詞句相当として格助詞を下接する例や、(26) のように形式動詞「スル」をともない、ナリ並列句そのものが動詞句になる例なども見られるようになる。(27) のように並列される項が語ではなく句レベルにまで拡張された例も出てくる。

(25) すぐ整然と秩序なり段落なりがはっきりするように納まる人は恐らくないでしょう。（硝子戸の中）

(26) 今度こそは下宿なり間借りなりして、当分気を抜こうと思い定めた。（行人）

(27) これを資本にして商買をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、（坊ちゃん）

これは、タイプⅢの意味が既に形式「ナリ」に焼き付き、関係を結ぶ要素Xを必要としなくなったということによって、ナリ並列構文が次の段階の発展を見せたということであろうか。明治期のナリ並列についても別途考察が必要であろう。これらの残った問題に関しては今後の課題としたい。

【使用テキスト】

・新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』1～4、『洒落本、人情本、滑稽本』（小学館）・日本古典文学大系『浄瑠璃集』上、『歌舞伎脚本集』上、『春色梅児譽美』、『浮世風呂』『浮世床』（岩波書店）・人情本刊行会第十回『恋の花染・花暦封じ文』、第十二回『春の月・春色恋廼染分解・青楼玉語言』（人情本刊行会）・歌舞伎台帳集成1～24（勉誠社）・洒落本大成2～27（中央公論社）・噺本大系1～19（東京堂出版）新潮文庫明治の文豪CD－ROM版（新潮社）

注

1）「タリ」「トカ」の他には、本稿で取り上げる「ナリ」そして「泣くやらわめくやら」のような「ヤラ」、「行くだの来るだの」のような「ダノ（ノ）」などが考えられる。これらは、例示的な要素の列挙という機能の点では共通するが、意味的にはそれぞれ異なっている。森山（1995）等参照。

2）ただし、ナリ並列が主節述語句にならない場合、次のように容認度が上がるものがある。

○湯なり粥なりを啜て，公債の利の細い烟を立てている。（浮雲）

3）他に、「行ったり来たり」の形式「タリ」、「雨は降るし、風も吹くし」の形式「シ」の二つも不十分終止用法が元になっていると言われている。

4）鈴木（1993）にも指摘がある。したがって、ここで見られる相違点が、時代によるものか、地域によるものか、容易には判断できない。

5）衣畑（2005）では、「ナリトモ」が接続助詞から副助詞へと変化する次のような三段階を仮定している。第一段階では、ナリがコピュラ動詞として述語名詞をとり動詞句を構成し、トモが接続助詞として機能し、従属句を形成する。第二段階では、ナリトモが一語化し、名詞句を取って主題句となり、主節動詞に対する項や付加詞となる。第三段階では、ナリトモが焦点句を作り、主節の動詞句がそのスコープに入り、動詞句内の要素を焦点にできる。実例を見ていくと15世紀～16世紀に第二段階、

17世紀頃には第三段階へと変化した例が観察される。

6) この縮約形の「なと」は現代の関西方言にも残存している。

7) 不十分終止用法いおいて、「XハP」という構造はかなり固定的なものであり、むしろ、不十分終止用法自体がこの構造に支えられていると言ってもよい。その点でタイプⅠの構造は、不十分終止という枠で考えるならば、破格といえる。江戸期に入るまで、不十分終止用法は「XハP」の構造を崩すことはなく、「ナリ」以外の不十分終止用法を持つ形態にはこのような例は見られないことから、本稿では、このような「ナリ」の例を不十分終止用法の一端と考えるのではなく、並列形式の初期段階と考える。

8) 連体修飾になる方が多く、連用修飾になるのは僅かである。

9) 現代語を鑑みるなら何故ナリ並列はタイプⅢのみを表すようになったのか、という点が新たに問題となる。この点は鈴木（1993）に既に指摘のあるところで、タイプⅠⅡは、他の形式によって表現しうる意味であったことが関係していよう。例えば、タイプⅡは、無論「～も」によって表現可能であるし、タイプⅠについても現代語訳に「～だし～だし」という訳が当たることからもわかるように、接続助詞シが発達するのに伴って「だ（じゃ）＋シ」によって表現可能になったと考えられる。

【参考文献】

出雲朝子（1985）「「はさみこみ」について ── 文法史的考察 ──」『国語学』143 pp. 14-26

京極興一（1965）「終止形による条件表現 ──「平家物語」を中心として ──」『成蹊大学文学部紀要』1 pp. 29-35

京　健治（1993）「「不十分終止」の史的展開 ── 旧終止形残存の文法史的意義」『語文研究』75 pp. 1-10

衣畑智秀（2005）『日本語の「逆接」の接続助詞とその周辺』（平成17年度大阪大学博士学位論文）

此島正年（1966）『国語助詞の研究』（桜楓社）第三章 pp. 224-226

鈴木　浩（1993）「ナリによる並列表現における選択用法成立の経緯」国語学173 pp. 28-40

森山卓郎（1995）「並列述語構文考 ── たり・とか・か・なりの意味、用法をめぐって ──」『複文の研究』下（くろしお出版）pp. 127-149

矢毛達之（1999）「仮定条件句末形式出自の助詞について ── デモ・ナリトモの意味機能変化 ──」語文研究84 pp. 28-38

（大学院博士後期課程）

SUMMARY

The change of "NARI" as a coordinate conjunction.

Miho IWATA

In modern Japanese, there are some coordinate conjunctions which express exemplification. NARI is one of them. Especially, NARI implies selectivity. For example, "A nari B nari suru" express that either A or B will be practiced. But, in the early Edo period, NARI did not have such meaning. This study examines why NARI got to imply selectivity. I divide the develpoment of NARI in Edo period into three stages from the perspective of the meaning and the syntactic function of NARI phrase.

Stage 1 [[X -wa [A nari B nari]] [...S]] (In the 18th c.～)

Stage 2 [[A nari B nari] X] (In the middle of the 18th c.～)

Stage 3 [[[A nari B nari] X-ga/o] Y] OR [Y-ga/o [[A nari B nari]X]] (In the 19th c.～)

NARI phrase of stage 3 has acquired selectivity. Therefore an important change occured from stage 1 and 2 to stage 3. In stage 1, the items of NARI phrase, both A and B are connected with X to the effect that "X=A and X=B". The whole (X and NARI phrase) serve as subordinate clause for the main clause (S). In stage 2, NARI phrase sloted into main clause, and filled the role of a topic. This is the important syntactic change. But also in this stage, both A and B is connected with X (predicate) equally (A=X and B=X). That is to say that in stage 1 and 2 , the function of NARI is to take out some elements from a material which is a noun involved in NARI phrase syntactically. In stage 3, the notable change is that NARI phrase turned modifier. I assume that the function of stage 1 and 2 is kept, and the items of NARI phrase are involved in X. In addition X has a syntactical relation to another clause, Y. At this point, A and B are arranged in parallel with Y. I suggest that this point has led to exemplification.

キーワード：ナリ，並列，例示，選択，江戸